

日語副詞「たぶん ‘tabun’」の使用－從日語第二語言 人士與中文第二語言人士的自然會話來探討－

林恒立

北海道大學 博士課程

摘要

本文觀察日語第二語言人士（中文母語人士）與中文第二語言人士（日語母語人士）建立互動時的自然會話，發現諸多含有副詞「たぶん ‘tabun’（意同中文“大概”）」之語鏈（sequence）出現。以往提到「たぶん」的定義，總圍繞在“推量”、“推測”、“可能性”等解釋，純屬說者個人內心狀態之表示。然而，透過會話分析（CA）、相互行為分析（互動分析）裡的投射（projection）與 C. Goodwin（2000）提到的多模組（multi-modality）等概念來考察自然會話語料中的「たぶん」以及同時出現的非語言行動和聽者反應，發現「たぶん」若出現在不同的語境下，說者與聽者共同達成的行為也相對的有所不同，如「投射（預示）接下來準備由說者回答或表達看法」、「投射（預示）目前所闡述的回答或看法即將說畢並回過頭來標記以上回答或看法是來自於說者的主觀」、「取得或讓渡發話權」等。本文認為，在相互行為（互動）過程裡，副詞「たぶん」的使用並非僅止於說者個人的認知作業，而會話當事人雙方之間的一種社會表達方式，亦是用於組成互動的一種資源或要素。

關鍵詞： 日語第二語言人士、中文第二語言人士、たぶん ‘tabun’、
會話分析、相互行為分析（互動分析）、多模組

副詞「たぶん」の使用

－日本語第二言語話者と中国語第二言語話者の自然 会話データから－

林 恒立

北海道大学大学院 博士後期課程

要 旨

これまで、副詞「たぶん」は「推量」や「推測」、「可能性」など、話し手の個人の心的状態を表示するものとして捉えられてきた。ところが、自然会話データの中の「たぶん」の使用を、非言語行動と聞き手の反応も含め、会話分析 (CA)、相互行為分析における「投射」および C. Goodwin (2000) の「マルチモダリティ」の概念を用いて見ていくと、同じ「たぶん」を含む発話であっても、異なる文脈に埋め込まれると、話し手と聞き手によってその場で行なわれていること・達成されていることも異なることが分かった。本稿では、「たぶん」の使用は、単に話し手個人の中の推量などの認知的作業にとどまるのではなく、相互行為において、会話の当事者たちの中で一種の社会的なものとして使用され、インタラクションを組織化するためのリソースであることを検討した。

キーワード：日本語第二言語話者、中国語第二言語話者、「たぶん」、
会話分析、相互行為分析、マルチモダリティ